

2023年11月5日（日）主日朝礼拝説教

『麦と毒麦』 井上隆晶牧師

出エジプト記 23章 27～30節、マタイ福音書 13章 24～35節

①【たとえ話の意味】

24～26節に「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。芽が出て実てみると、毒麦も現れた。」とあります。36節以降にこの例え話のイエス様による説明が書かれています。それによると良い種を蒔く者はキリスト、畑は世界、良い種は神の国の子たち、毒麦は悪い者の子ら、毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れとは世の終わり、刈り入れる者とは天使たちであることが分かります。キリストが最初に人を創造された時、それはとても良いものでした。しかし悪魔が来て、人の中に罪を蒔き、それによって人は死にました。「人々が眠っている間に」というのは信仰の眠りを意味しています。弟子たちは神の国はすぐにでも現れると期待していました。しかし実際はそうではありませんでした。そこでイエス様は、神の国というものを誤解しないようにこの話しをされたのです。神の国は既にこの世に来ているのですが、私たちが期待するような姿では来ていません。「神の国」を白とすると「地獄」は黒になり、この世は「神の国」と「地獄」が共存する「灰色」のような状態になっているのです。この世では教会は終末の時まで、罪や悪や死の力と戦い続けなければなりません。

②【悪がこの世に存在する理由】

27～28節に「僕たちが主人のところ来て言った。『だんな様、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』主人は『敵の仕業だ』と言った。そこで僕たちが、『では行って抜き集めておきましょうか』と言うと…」天使がキリストのところに行って「どこからこの世界に悪が入ったのでしょうか」と尋ねると、主は「敵の仕業だ」といいます。敵とは「悪魔」です。

（1）この世に悪が存在する理由の一つは、まず悪魔がいるからです。創世記でアダムとエバを誘惑した蛇という象徴で、悪の存在があることを聖書は語っています。パウロもはっきりと「悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身につけなさい。私たちの戦いは血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。」（エフェソ 6：11～12）と語っています。しかし現代の多くのキリスト教徒は悪魔の存在を認めませんし、神学校では悪魔について教えません。むしろ悪魔は神話であって、人間がすべて悪いのだと教えます。しかしもし悪魔がいなければ、人間は自然に墮落したことになり、神の創造は失敗であることになります。そこで教父たちはこう考えました。人間はもともと善を選択するようになっていたにも関

ならず、悪を選択したとするなら、人間の意志とは別の意志による説得があったのであり、人間の意志はそれに従ってしまったのです。この人間とは別の意志を持つ者こそ「悪魔」であって、人間が創造される前に、すでに悪は霊的世界に始まっていました。悪は人間の意志を通してこの世界に入り込んできました。ですから悪とは人間本性（生まれつきのもの）ではなく習性なのです。

●「罪とは意志の病であり、意志はこの病によって善の幻影を善と取り違えて誤るのである。」（4世紀のニュサのグレゴリオス）

現代の神学校が悪魔を認めないので、それは贖罪論にも影響を与えています。つまり神と人間との敵対関係のみがあるのであって、人間は神の怒りをなだめるために犠牲の供え物としてキリストを献げたという中世のアンセルムスの贖罪論だけになってしまったのです。古代の「勝利者キリスト」のような神と悪魔との戦いというダイナミックな考え方はなくなってしまいました。神学の貧弱さを感じます。

（2）この世に悪が存在する理由の二つ目は、神がそれを許しておられるからです。29～30節を見ると「主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。』」とあります。さっさと悪をこの世界から抜き取れば、この地上はもっと住み良い世界になると誰もが思います。しかし主はそのままにせよと言われます。その理由は、毒麦と善い麦の根がからまっているように、善と悪が人の中からみあっているからです。悪を滅ぼしたらすべての人を滅ぼさなければならなくなります。そこでそのままにしておくのです。そして「刈り入れの時、『まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』と、刈り取る者に言いつけよう。」といいます。収穫の時になると根が枯れて実だけが残りますから、その実で判断し、善い実天国に入れ、悪い実は焼いてしまおうというのです。刈り入れとはその人の人生の終わりであり、この世の終わりです。神様はその人の人生の終わりまで、その人がどんな実を結ぶかを見ておられます。

③【神は万事が益となるように共に働く】

神は悪をそのままにしておかれますが、ではどうすれば悪い環境の中で人は善い実を結ぶことができるのでしょうか？それは神は悪の中でも働いておられるということだと思えます。精神病になる原因として「遺伝と環境と運」だと言われています。名古屋大学で精神医学を教えている尾崎紀夫氏は「あらゆる出来事には偶然が関与する。偶然とはつまり『運悪く病気になった』ということである。」と言っています。尾崎氏は原因が分からないのを運と呼んでいるのですが、私たちは、それを「神の計画・神の配剤」と呼びます。

●先日、精神科医の夏苺郁子先生の講演会に行ってきました。先生は「私は運が良いと思う」と言っておられました。しかしどう見ても彼女の人生は運が悪いと

しか言いようがありません。母親は精神病、両親は離婚、悲惨な子供時代を送っています。この親の元に生まれて運が悪いと思うのです。でも振り返ってみると運が良かったとしか思えないことがあると言うのです。母親は統合失調症でしたが、そのことを黙っていたので優生保護法による避妊手術を受けませんでした。もし手術を受けていたら、自分はこの世にはいないというのです。また母親の病により、ご自身も精神疾患を発症し、当事者、家族、医者という三つの立場を体験することにより、日本中で講演をするようになり、今の研究をすることができるようになりました。そこまで行くのに二人の人との出会いがありました。一人は『わが家の母はビョウキです』という本を描いた中村ユキさんという漫画家と出会ったこと。もう一つは名古屋大学の教授との出会いでした。日本の精神医学の遅れを訴えるため大学を訪れた時、その教授は夏莉先生に「私は勉強しない人とは一緒にやりたくない」とはっきり言われ、目が覚めたそうです。夏莉先生は「恨みは人を元気にさせないことが分かった。勉強を始め、知識を得ることで希望が見えて来た。」と言っておられました。彼女の人生を見ると、どんなに悪い環境に置かれても、神様が助けてくれる人たちを周りに置いて下さり、その人たちとの出会いによって悪が善に変わって行ったということを教えられます。

YWCA の聖書の勉強会でも話しましたが、神は悪を取り除く、目の前の問題をなくすという方法で人を救うのではなく、悪や病や問題があっても、その中にあって苦しみを共に背負い、問題や病を連帯するという方法で人を救うのです。神が共にいれば、どんな悪も善に変えられることを私たちは知っており、万時が益となることも知っているからです。「あなたは善なる方、すべてを善とする方。」(詩編 119 : 68)「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを私たちは知っています。」(ローマ 8 : 28)

問題があることを悩むのではなく、神が共にいることに気づきましょう。問題があっても、病があっても神はあなたと共にいて下さいます。悪から善を生み出し、死から命を生み出す神に希望を持ち、その神と共に歩み、その神にしがみついて祈りましょう。キリスト神よ、私の悪を善に変えてください。あなただけが救いです、どうぞ憐れんでくださいと祈りましょう。